

## 田中彌性園収蔵外科免許状と紅毛流外科の普及について

W・ミヒェル（九州大学）

田中彌性園収蔵の免許状は享保3年11月(1718)、中嶋善伯により高木兵左衛門へ交付されたものである。花押は「義勝」で、印は未確認である。免許の前半は「流派」に関する概観及び神文で、後半は系図となっている。

中嶋善伯の医術の「元祖」としては、「阿蘭陀外科アルマンズ」、「阿蘭陀外科カスハル」、及び「紅毛メステルカステイラ」があげられている。メステル（オランダ語meester）は外科医を意味するが、カステイラ（スペイン語castilla）は人名ではなく16・17世紀の日本で「南蛮国」や「南蛮人」の意味合いで用いられたので、「紅毛メステルカステイラ」はオランダ系ではなく南蛮系の医学を示している。免許の系図に見られる吉田自休の名もこの解釈を裏付けている。

アルマンズは、出島オランダ商館の外科医Hermanus Katzであるが、いわゆるカスパー流外科の元祖Caspar Schambergerの後任者として1660年来日したので、順序が乱れていることになる。「初代」中嶋善益は商館医と直接に交流したことがなかったようだ。教義の媒体として書物と日本人医師による口伝が示されている。上記の記述を総合すれば、中嶋家の医術は南蛮流外科を含有する初期紅毛流外科に由来していることになる。

「師弟ヶ系図」は南蛮流外科とされる吉田自休で始まり、興味深いことに先行研究に見られない彼の住所まで記されている。浅田宗伯（『皇国名医伝』、嘉永4）などは自休の門弟として、吉田自庵と村山自伯（1647-1706）をあげているが、本免許状の場合は、中嶋善益がその間に入っている。

善益の背景はまだ不明であるが、同系図は長崎奉行牛込忠左衛門が大坂へ引っ越す時期を示しているので、忠左衛門が小普請入りした1681年と考えられる。

村山自伯及び坂田(吉田)自庵が公方様（五代将軍綱吉）の外科医と紹介されていることは、浅田宗伯などによる説と一致している。中嶋善伯の師としてあげられている森雲仙法院は綱吉の侍医で、いくつかの業績が確認できる人物である。免許が交付されたのは、八代将軍の吉宗時代になっている。残念ながら中嶋善益についてはまだ解明できていない。

善益のもう一人の師として「アルマンズカスハル一流」の河口良庵があげられている。ここでもまた長崎での住所の記載が注目に値する。あらゆる文書資料が裏付けているように、唐津土井藩の藩医河口良庵春益（1629-1687）はカスパー・シャムベルゲルが来日した1649年から1670年代にわたり多くの出島商館医に関する資料を入手し、それらをまとめた

り体系化したりしていた。また、良庵はその後京都及び四国の大洲で晩年まで紅毛流外科の普及に尽力した。紅毛流外科の元祖として、彼は後世の医師より来朝した西洋人を重要視していたが、これらの記述はその後次第に免許状から消えた。

本免許状の前半は、門弟高木兵左衛門は神々を勧請して違契したら罰を受けるとの内容になっているので、一種の起請文でもある。出島商館医が交付する免許にはこの記述は見られず、日本国内における西洋医学の受容の特徴の一つである。また、免許とは別に、次第に拡大する紅毛流医界において教義の厳守を求める独自の神文も現存している。

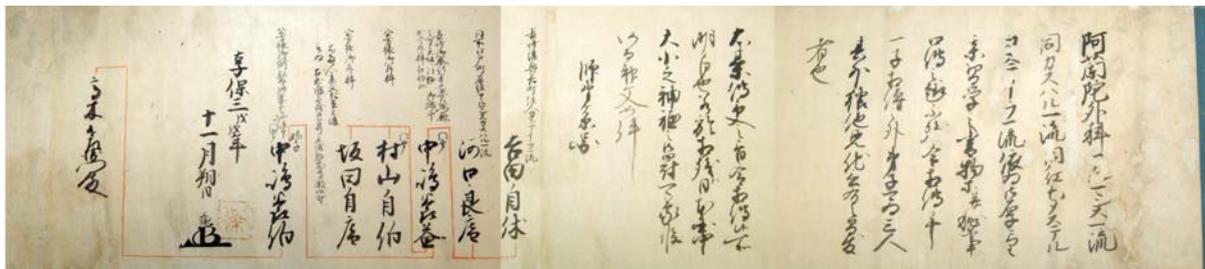
『日本医学の夜明け』などの医史学書物には南蛮流外科、カスパル流外科、栗崎流などの一連の「流派医家系図」が掲載されているが、それらの信憑性及び意味は再検討に値する。たとえば多くの文献で利用されてきた『日本医学の夜明け』のカスパル流系図の初期の様子を検証してみると、河口良庵及び猪俣伝兵衛の位置づけには異存はないが、長崎の儒医向井玄升は大目付井上筑後守政重の命令によりシャムベルゲル離日の6年後に初めて出島を訪れるようになった。また鳥飼道節のオランダ人関係の活動を示す資料は一つも確認できない。人と人との接触（師弟関係）を示すものとしてこの系図には大いに問題がある。

またいわゆる元祖カスパルの教えは後世のカスパルの流派にとってどれほどの役割を果たしたのだろうか。同系図には華岡青洲と一連の門弟も見られる。青洲の外科術は間違いなくシャムベルゲルの外科術をはるかにしのいでいた。カスパルに遡るものとしては、2～3の膏薬しか利用されなかったようだ。しかし、カスパルの膏薬方はその他の流派の資料にも見られるので、位置づけの根拠として説得力を欠いている。パラダイム論から見ると、この系図もあまり機能していないと言わざるを得ない。

出島商館医が交付した免許、河口良庵や西玄甫など初期の日本人「元祖」が交付した免許、当時の神文及び田中彌性園收藏外科免許のような後世の免許をもとに紅毛流外科の普及を再現してみると、断片的にはなるが、信憑性はより高まると言えるのではないだろうか。

## 資料

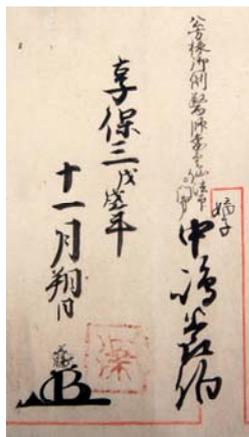
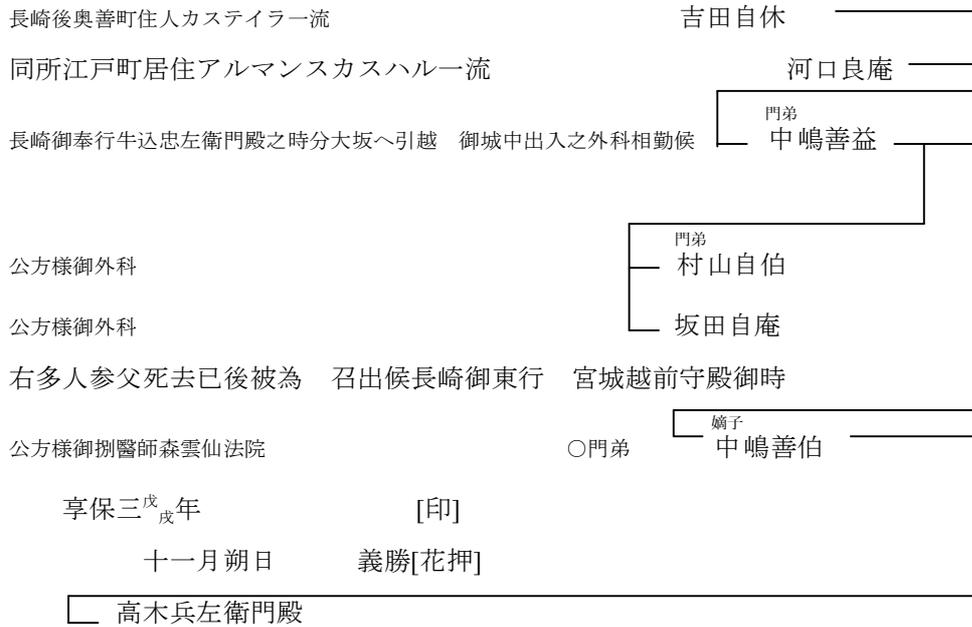
### (1) 田中彌性園收藏外科免許状



阿蘭陀外科アルマンズ一流同カスハル一流同紅毛メステルカステイラ一流依為御厚意某習学之書物等  
并秘事口傳之趣不殘全相傳畢一子相傳之外弟子可為三人其外猥他見他言有之間敷者也

右某傳受之旨全相傳候所明白也若於相残<sup>レ</sup>日本国中大小之神祇之御罰可蒙候依而神文如件

師弟ケ系圖



(2) 年表

1649年	Caspar Schamberger (1623-1706) が来日。1 1月に4名の日本人医師と交流。
1650年	シャムベルゲル、特使Frisiusと共に江戸に到着。10ヶ月の長期滞在。西吉兵衛及び西玄甫が同伴。
1650年10月	江戸で通詞猪股伝兵衛が長崎奉行馬場三郎左衛門のため報告書を提出する。
1650年11月	長崎で猪股伝兵衛が長崎奉行山崎権八郎に報告書を提出する。
1651年11月	猪股伝兵衛があらためて文書をまとめる。
	シャムベルゲル関連の報告資料を入手した河口良庵 (1629-1687) は、その後の出島商館医にも高い関心を寄せる。
1651年1月14日	「日曜日、昼食をすませるとしばらくして奉行のもとから、通詞全員と、これまで何度も触れた日本人医師が遣わされ、ヨーロッパ流の治療術に関する2冊の書物について語った。これらの書物は、この医師が大目付筑後

	殿の命を受け、我々の上位外科医が誠実にまたよい文体で語ったものを、通詞の助けを得て翻訳したものだ。これから奉行の名においてこの書物を江戸へ持参し、大目付に渡す所存であるという。しかしまず外科医が署名し、さらには私自らも署名して、外科医が上述の医師にさまざまな著作を基に教授したことには全く間違いがなく、最高の知識をもって行われたものであることを保証しなければならなかった。私自身は異様でばかげた理由づけだと思い、断りたかったが、逆らう余地はほとんどなく、奉行の要求に従わざるを得なかった。」[NA, NFJ 70, Dagregister Dejima: 14.1.1657]
1658年7月10日	商館日誌には、波多野玄洞はこの5、6ヶ月間、毎日指導を受けている、と書いてある。彼はまもなく江戸へ行くことになっており、オランダ語で、オランダ人外科医に指導を受けたことを証明して欲しい、と要請した。代官への敬意もあり、奉行もこの教育を承知していたので、ブヘリオンは外科医のデ・ラ・トンプ (Steven de la Tombe) に、この証明書を発行するよう命じた。[NA, NFJ 71, Dagregister Dejima:10.7.1658] (現存不明)
寛文5(1666)年	岩国藩医朝枝喜兵衛が免許を受ける (沼田次郎『洋学』52ページより)
1666年11月3日	外科医Arnout Dirckszが平田長大夫に免許状を交付。(中津藩医辛島正庵による写しが現存)
1668年1月21日	外科医Daniel Busch が嵐山甫安に免許状を交付。(商館長Jacob Gruijs, Nicolaas de Roi) (平戸観光資料館蔵)
1668年1月21日	外科医Arnout Dirckszが瀬尾昌宅に免許状を交付。(京都大学附属図書館蔵)
1668年2月20日	商館長ランスト (Constantin Ranst)、外科医ディルクス (Arnout Dircksz) と下位商人フリート (Daniel van Vliet) が通詞西吉兵衛のために署名した免許状は異例の長さで、しかも彼のことを絶賛している。(Kleiweg de Zwaan, 1917より。現存不明)
寛文8(1668)年9月	外科医Arnout Dirckszが太田黒玄淡に免許状を交付。(溝上國義氏蔵)
1673年12月17日	11月26日から外科医ホフマン (Willem Hoffman) に習った筑後の領主の侍医が免許状を受ける。[NA, NFJ 87, Dagregister Dejima: 17.12.1673] (現存不明)
延宝元(1673)年	西玄甫が、幕府の医官となる。
1674年2月16日	「奉行は外科学の教育を受けさせるよう、またも医師を送ってきた。ロバに博士号を与えるため、外科医には大急ぎで仕事をさせる。通詞によると、この医師は筑後守に仕える医師であり、先だって外科学の教育を終了し立派な免許を受け取った別の弟子と同じように、そのようなオランダ語の免許状を取得させるため、奉行が取り計らったということだ。」[ARA, NFJ 87, Dagregister Dejima: 16.2.1674]
1685年10月18日	黒田藩の藩医原三信が外科医クローン (Albert Croon) より免許を受ける。(原家蔵)
元禄4(1691)年	吉田昌全 (1644-1713、号は自庵、本姓は坂田) 及び村山自伯 (1647-1706) は、幕府の医官となる。

長崎奉行牛込忠左衛門重恭、在任：1671-1681年

長崎奉行宮城主殿越前守和澄、在任：1687-1696年

### (3) 出島商館長と商館医 (1649-1692)

商館長	商館長の任期	外科医
Anthonio van Brouckhorst	5.11.1649 - 25.10.1650	Caspar Schamberger (Leipzig)
Pieter Sterthemius	25.10.1650 - 3.11.1651	Caspar Schamberger
Adriaen van der Burgh	1.11.1651 - 3.11.1652	Johannes Wunsch (Erfurt)
Frederick Coijet	4.11.1652 - 10.11.1653	Johannes / Jan Stipel
Gabriel Happart	4.11.1653 - 31.10.1654	Johannes / Jan Stipel

Leonard Winninx	31.10.1654 - 23.10.1655	Johannes Wunsch, Pieter Jacobsz.
Joan Boucheljon	23.10.1655 - 1.11.1656	Hans Juriaan Hancke (Breslau), Pieter Jacobsz.
Zacharias Wagener / Wagenaer	1.11.1656 - 27.10.1657	Hans Juriaan Hancke, Pieter Jacobsz.
Joan Boucheljon	27.10.1657 - 23.10.1658	Steven / Stephanus de la Tombe (?), Pieter Jacobsz.
Zacharias Wagener	22.10.1658 - 4.11.1659	Stephanus de la Tombe, Pieter Jacobsz.
Joan Boucheljon	4.11.1659 - 26.10.1660	Stephanus de la Tombe, Pieter Jacobsz.
Hendrick Indijck	26.10.1660 - 21.11.1661	Herman[us] Katz
Dirck van Lier	11.11.1661 - 6.11.1662	Herman Katz, Palm (?)
Hendrick Indijck	6.11.1662 - 20.10.1663	Daniel Busch, Abraham van Kerpen
Willem Volger	20.10.1663 - 7.11.1664	Daniel Busch, Herman[us] Visscher (Fischer ?)
Jacob Gruijs	7.11.1664 - 27.10.1665	Daniel Busch
Willem Volger	28.10.1665 - 27.10.1666	Johannes Wunsch (?), Cornelisz. de Laber
Daniel Six (Sixx)	18.10.1666 - 6.11.1667	A[e]rnou[d]t Dircksz.
Constantin Ranst	6.11.1667 - 25.10.1668	Arnout Dircksz.
Daniel Six	25.10.1668 - 14.10.1669	Arnout Dircksz. (9.1.1669)
Francois de Haas	14.10.1669 - 2.11.1670	Moijses Maroon (1.1.1671), Pieter van der Veste[n], Godefried Haeck (pharmacist)
Martinus Caesar	2.11.1670 - 12.11.1671	Moijses Maroon, Pieter van der Veste[n], Frans Braun (pharmacist)
Johannes Camphuijs	22.10.1671 - 12.11.1672	Willem Hoffman, Frans Braun (pharmacist), Pieter van der Vesten (assistant)
Martinus Caesar	13.11.1672 - 29.10.1673	Willem Hoffman, Hans Schoonsoon (?), Frans Braun (pharmacist)
Johannes Camphuijs	29.10.1673 - 19.10.1674	Willem Hoffman, Adriaen van Strijkersberg
Martinus Caesar	20.10.1674 - 7.11.1675	Willem Hoffman, Willem ten Rhijne
Johannes Camphuijs	7.11.1675 - 27.10.1676	Willem Hoffman, Willem ten Rhijne
Dirck de Haas	27.10.1676 - 16.10.1677	Reinier Wier / Weijn (?)
Albert Brevincq	16.10.1677 - 4.11.1678	Reinier Wier / Weijn (?)
Dirck de Haas	4.11.1678 - 24.10.1679	Jacob Dijckhoff
Albert Brevincq	24.10.1679 - 11.11.1680	Jan Bartelsz. (Jan Bartelsa Benedictus)
Isaac van Schinne	11.11.1680 - 31.10.1681	Jan Bartelsz.
Hendrick Canzius	31.10.1681 - 20.10.1682	Jan Bartelsz.
Andreas / Andries Cleyer	20.10.1682 - 8.11.1683	Jan Bartelsz.
Constantin Ranst de Jonge	8.11.1683 - 28.10.1684	Hendrik Obé
Hendrick van Buijtenhem	25.10.1684 - 7.10.1685	Hendrik Obé
Andreas Cleyer	17.10.1685 - 5.11.1686	Hendrik Obé, Albert Croon
Constantin Ranst de Jonge	5.11.1686 - 25.10.1687	Jan Bartelsz.
Hendrick van Buijtenhem	25.10.1687 - 13.10.1688	Jan Bartelsz.
Cornelisz. van Outhoorn	13.10.1688 - 1.11.1689	Jan Bartelsz.
Balthasar Sweers	1.11.1689 - 21.10.1690	Jan Stockman
Hendrick van Buijtenhem	21.10.1690 - 09.11.1691	Engelbert Kaempfer
Cornelis van Outhoorn	9.11.1691 - 29.10.1692	Engelbert Kaempfer, Jan Stockman

ヴォルフガング・ミヒェル「17世紀の平戸、出島蘭館の医療関係者について『日本医史学雑誌』第41巻第3号(1995年)、85～102頁参照。

## (4) 神文の例

### 宝暦8年(1758)阿蘭陀カスハル傳神文之事

阿蘭陀カスハル傳神文之事

- 一 當流外科療治之手段<sup>并</sup>藥油膏藥内藥  
秘藥等品々御口傳罷成候秘方他人者不成申親  
子兄弟たりと言共他言一切仕間敷候事
- 一 當流相傳之秘書御傳受罷成候節是亦他

人ハ不及申親子兄弟たりと云共他見一切仕間敷候事

附御免無之内外人江相傳仕間敷候事

一 御傳受罷成候品々少之疎畧仕間敷候事

右之條々於相背ハ

日本国中大小之神祇伊豆箱根両所権現別而

氏神之神罰冥罰可罷蒙者也仍而神文如件

嶺田村\*

寶曆八年戊寅二月十四日 本間春■

道勝（花押）

櫻井尚友軒先生

\*静岡県小笠郡（遠江国）か

## 明和 4 年（1767）阿蘭陀カスハル傳神文之事

阿蘭陀カスハル傳神文之事

一 當流外科療治之手段并藥油膏藥内藥秘藥

等品々御口傳罷成候秘方他人者不及申親子兄弟たりと

言共他言一切仕間敷候事

一 當流相傳之秘書御傳受罷成候節是又他人者不

及申親子兄弟たりと言共他見一切仕間敷候事

附御免無之内外人江相傳仕間敷候事

一 御傳受罷成候品々少も諫略仕間敷候事

右之條々於相背者

日本国中大小之神祇伊豆箱根両所権現別而氏神

之神罰冥罰可罷蒙者也仍而神文如件

川田古御治

良恭

同康藏

義福

明和四年丁亥五月二日

櫻井尚友軒先生

## 明和 8 年（1771）阿蘭陀カスハル傳神文之事

阿蘭陀カスハル傳神文之事

一 當流外科療治之手段並藥油膏藥内藥

秘藥等品々御口傳罷成候秘方他人者不及

申親子兄弟タリト言共他言一切仕間敷事

一 當流相傳之秘書御傳受罷成候節是又他人

者不及申親子兄弟タリト言共他見一切仕間

敷候事

附御免無之内外人江相傳仕間敷候事

一 御傳受罷成候品々少<sup>モ</sup>疎略仕間敷候事

右之條々於相背者

日本國中大小之神祇伊豆箱根両所権現別而

氏神之神罰冥罰可罷蒙者也仍而神文如件

明和八年辛卯六月八日 新聞道敬

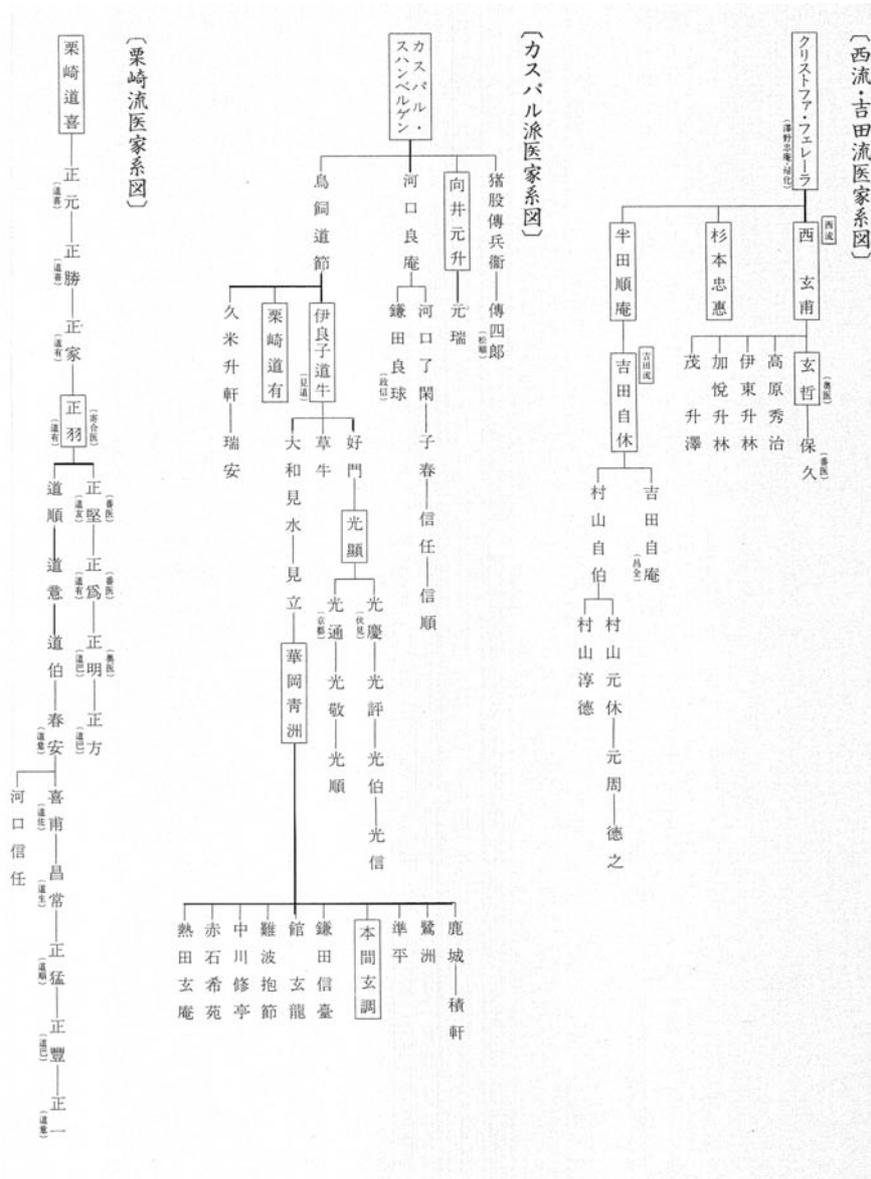
爲棟

櫻井尚友軒先生

(W・ミヒエル蔵)

## (5) 流派医家系図の例

国公立所蔵史料刊行会編『日本医学の夜明け』東京、日本世論調査研究所、1978年より



## (6) 河口良庵による免許皆伝 (1666年)

余自結髮專攻外治搜挾諸家浩瀚汪洋系得適從而歸[//]一蓋医之為法也治内之難治外尤難内症系及于外外症[//]而原于内也内外合一之論中華□ 至矣尽矣不竣復贅祇[←示+氏] [//]憾外治因无捷徑系中其肯綮洵滄海之遺珠也近代紅毛[//]加須波留偶狭外科靈術而懸壺於肥長崎市肆其僂方之[//]殊效柳樹起瘤非人間世之所睹殆怪来自龍宮如在蒼姬[//]之世当列之天官瘍医既達江都台聽命諸医重譚為書献[//]之當中是阿蘭陀外科行千本邦余亦寓止幸得親炙而興[//]聞審其殺青而破割□ 之術膏油煎煉[=火+束]之法興夫外国藥品[//]之蘊全備矣嗣后須庭賓阿無須与利安阿留曼須等良医代來益為之參究而有所得救活之妙竅也吾子遊余[//]門下潜心讚研有数年所因探青□ 中而耐焉匪其人而勿叨伝之儻有恃能而自負則其師之罪人也右云医[//]者意也意思精則得之其青於藍□ 無望于他日哉勉旃慎旃[=方+■]

良庵河口春益謹書

⑩

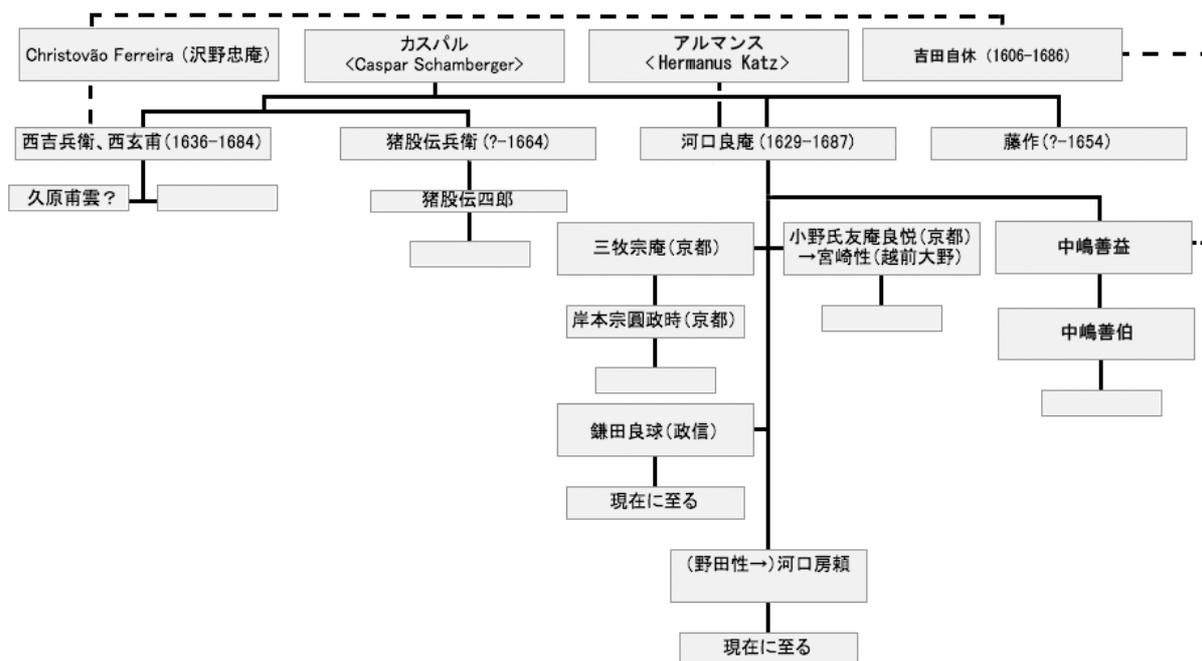
印

寛文六丙午歲孟春吉祥  
授河口良閑彦丈

## (7) カスパル流写本の普及

A(江戸、1650年10月)	B(長崎、1650年11月)	C(長崎、1651年11月)	D
江戸において通事猪股伝兵衛が長崎奉行馬場三郎左衛門のため報告書を提出する。	長崎において通事猪股伝兵衛が長崎奉行山崎権八郎に報告書を提出する。それはAの写しと思われる。	通事猪股伝兵衛による文書。A・Bの写しか改訂か。	由来の断定できないカスパル流文書
↓	↓ 河口良庵	↓ 西玄甫	
「阿蘭陀外科医方秘伝」(故佐藤氏) / 「阿蘭陀加須波留秘方」(成田)	「外科要訣」(河口家) / 「阿蘭陀外療集」(慶大) / 「カスパル伝方」(京大) / 「阿蘭陀外科書」(杏雨) / 「阿蘭陀外科書」(慶大) / 「阿蘭陀外科書」(九大) / 「外科加須波留方」(慶大) / 「阿蘭陀流伝授本」(宗田文庫) / 「阿蘭陀外科一流書」(宗田文庫) / 「阿蘭陀外療秘伝」(慶大) / 「阿蘭陀流外治」(慶大) / 「紅毛外科」(慶大) /	阿蘭陀十七方(京大) / 「阿蘭陀外科」(京大) / 「阿蘭陀外科書」(慶大) / 「紅毛外科集」(和田コレクション) / 「阿蘭陀南蛮口一切和」 /	「阿蘭陀流外科」(京大) / 「阿蘭陀流外科書」(京大) / 「阿蘭陀加須波留秘密之方」(宗田文庫) / 「阿蘭陀流外科書伝」(慶大) / 「阿蘭陀外療秘伝」(慶大) / 「紅毛膏液」(東大) /

## (8) 初期カスパル流外科の系図



## (9) 文書資料の諸問題

- 免許と神文からは何が読み取れるか
- 流派の「元祖」に関する情報の信憑性
- 資料の普及の具合及び経路の確認
- 資料の所蔵は何を示しているか
- 資料の所蔵と当時の医療内容との関連性は
- 流派とは何か

## 参考資料

J.P. Kleiweg de Zwaan: Völkercundliches und Geschichtliches über die Heilkunde der Chinesen und Japaner : mit besonderer Berücksichtigung holländischer Einflüsse. Haarlem, Erven Loosjes, 1917.

Wolfgang Michel: Von Leipzig nach Japan - Der Chirurg und Handelsmann Caspar Schamberger (1623-1706). Iudicium Verlag, München, 1999.

浅田宗伯著『皇国名医伝』江戸、須原屋茂兵衛、嘉永4(1851)年序。

飯塚秀三「西玄甫より久原甫雲に授与された阿蘭陀流外科免許状」『医譚』第83号、2005年、45～60頁。

大槻如電原著、佐藤榮七増訂『日本洋學編年史』東京、錦正社、1965年。

川島恂二『土井藩歴代蘭医河口家と河口信任』東京、近代文芸社、1989年。

岸本裕「本朝和蘭外科所謂カスパー流外科の本朝史料」日本医事新報、第802号、昭和13年1月22日(医学博士、京都市麩屋町2条下り)。

古賀十二郎『西洋医術伝来史』東京、日新書院、昭17年。

古賀十二郎『長崎洋学史』長崎、長崎文献社、昭49年。

沼田次郎『洋学』東京、吉川弘文館、1989年。

ミヒェル・ヴォルフガング、杉立義一「太田黒玄淡の阿蘭陀外科免許状とその背景について」『日本医史学雑誌』第49巻第3号(2003年)、455～477頁。

ミヒェル・ヴォルフガング「カスパー・シャムベルゲルとカスパー流外科(II)」『日本医史学雑誌』第42巻第4号(1996年)、21～45頁。

ミヒェル・ヴォルフガング「カスパー・シャムベルゲルとカスパー流外科(I)」『日本医史学雑誌』第42巻第3号(1996年)、41～65頁。

ミヒェル・ヴォルフガング「九州大学蔵の「阿蘭陀伝外科類方」(阿蘭陀外科正伝)と向井元升について」『比較社会文化研究科紀要』、第2号(1996年)、75～79頁。

ミヒェル・ヴォルフガング「日本におけるカスパー・シャムベルゲルの活動」『日本医史学雑誌』第41巻第1号(1995年)、3～28頁。